

# 法華寺旧境内の調査

## －第331次

### 1 はじめに

個人住宅新築にともなう発掘調査である。法華寺は、平城山丘陵より南方向に伸び、平城宮東院周辺を先端部とする舌状の尾根の上に占地している。

調査地は、法華寺旧境内地内の中心伽藍の北東部にあたる。法華寺関連施設の存在が想定されているものの、周辺は早くから集落化が進み、現状では住宅密集地となっている。このため後世の削平により遺構の残存状態は良好でなく、既存の発掘調査においても明確な法華寺関連の遺構を検出できていない。したがって、本調査では法華寺に関連する遺構の存在の確認を目的に調査をおこなった。

調査区は東西12m、南北6mの逆L字形に設定した。調査面積は27㎡である。現地表面の標高は61.61m（北西隅）～61.31m（南東隅）、遺構確認面の標高は61.46m（北西隅）～61.25m（南東隅）で、南に緩やかに傾斜している。調査期間は2001年7月2日から5日である。

### 2 検出遺構

調査区全体にわたり、地表下5cm程で黄褐色の自然堆積土となり、これを遺構確認面とした。遺構は、古代～現代にわたり、多くが近世～現代の塵芥処理用の土坑である。ここでは、奈良時代の溝SD8300、近世遺構SX8277について報告する。

**SD8300** 調査区中央に位置する南北溝。幅1m、深さ0.1m程が残存していた。堆積土は灰色粘土である。大部分が削平されており、痕跡状に残存しているだけはあるが、堆積土中より奈良時代末を中心とした大量の土器が出土している。時期は奈良時代後半と考える。

**SX8277** 調査区南西隅に位置する遺構。北東隅部分のみ確認しているが、方形の平面形状を呈するものと想定できる。遺構内部は砂礫を多量に含む暗褐色土と、しまりの強い灰白砂を人為的に入れている。これは三和土のような効果を狙ったと考えられ、建物の土間になる可能性が高い。周囲には溝がめぐる。遺構内の土層中および溝よりカワラケ、陶器が出土しており、時期は近世と考える。

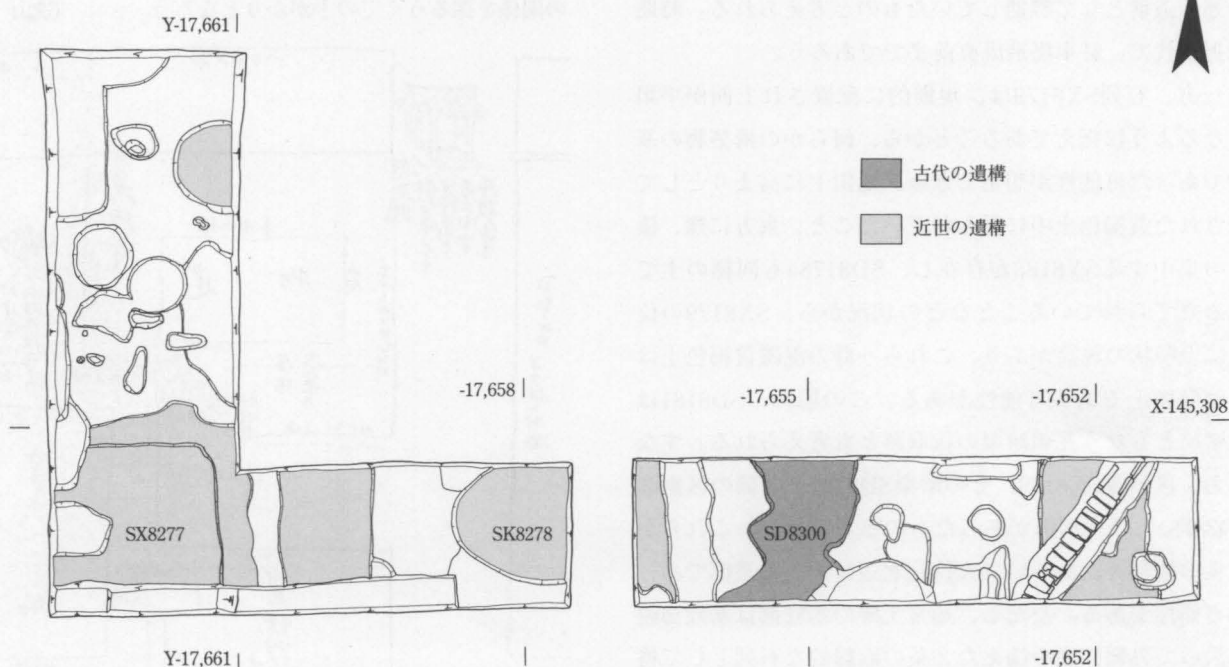


図145 第331次調査遺構平面図 1:80

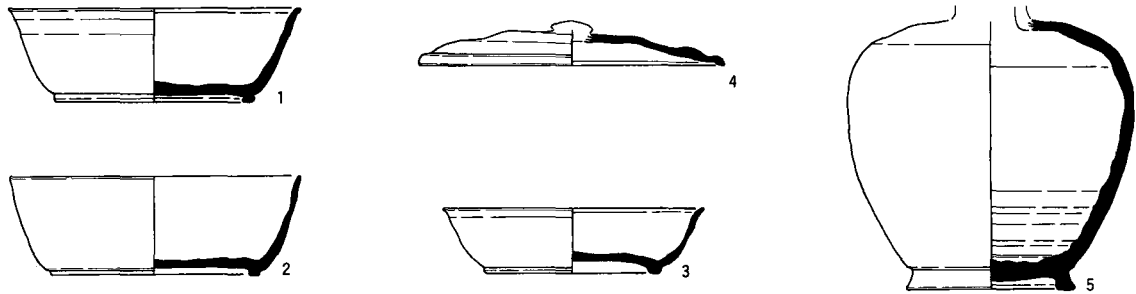


図146 SD8300出土須恵器 1:4

### 3 出土遺物

今回の調査の出土遺物には、土器類、瓦磚類がある。  
土器 古代の土師器・須恵器、近世のカワラケ、焙烙、近現代の陶磁器が各遺構より出土した。

南北溝SD8300からは、奈良時代の土師器・須恵器が大量に出土したので報告する。

土師器には、杯、鉢、壺、甕がある。磨耗が激しく、遺存状況は良好でない。

須恵器には、杯、杯蓋、壺がある。杯B(図146-1~3)はいずれも青灰~灰白色を呈し、焼成は堅緻で、器壁を薄く作っている。口縁部はやや外方に湾曲する。杯蓋(4)は青灰色を呈する。端部付近で屈曲し、若干肥厚する。つまみは欠損している。壺L(5)は青灰色を呈する。口頸部を欠損するが、接合痕跡から二段構成により製作されたものと考えられる。

これらはその特徴から平城宮土器編年V~VI期のものと考えられ、奈良時代末に位置づけられる。

瓦磚類 出土量は少なく、いずれも破片である。近世の軒平瓦1点、丸瓦26点(2.0kg)、平瓦69点(6.8kg)、磚1点が出土した。

### 4 まとめ

本調査では、法華寺に関連する遺構として、奈良時代末の南北溝SD8300を発見することができた。現在まで遺存する地割の検討からは、この溝が法華寺中心伽藍の東側区画施設の延長線上にあたる事が指摘できる。

また、調査地の南で1972年におこなわれた第79-6次調査では、南北方向にならぶ柱穴が検出されている。一案として、SD8300が中心伽藍北側の区画施設にともなうものである可能性があげられよう(図147)。

さらに、法華寺に西接する隅寺(海龍王寺)とその東限である東二坊大路の推定中軸線を西に折り返すと、ほぼ調査区東側の南北道路付近になり、かつての隅寺の西限と関連する可能性もある。

これらを踏まえ、今後周辺調査の進展を待って、慎重に検討を進める必要がある。(金田明大)

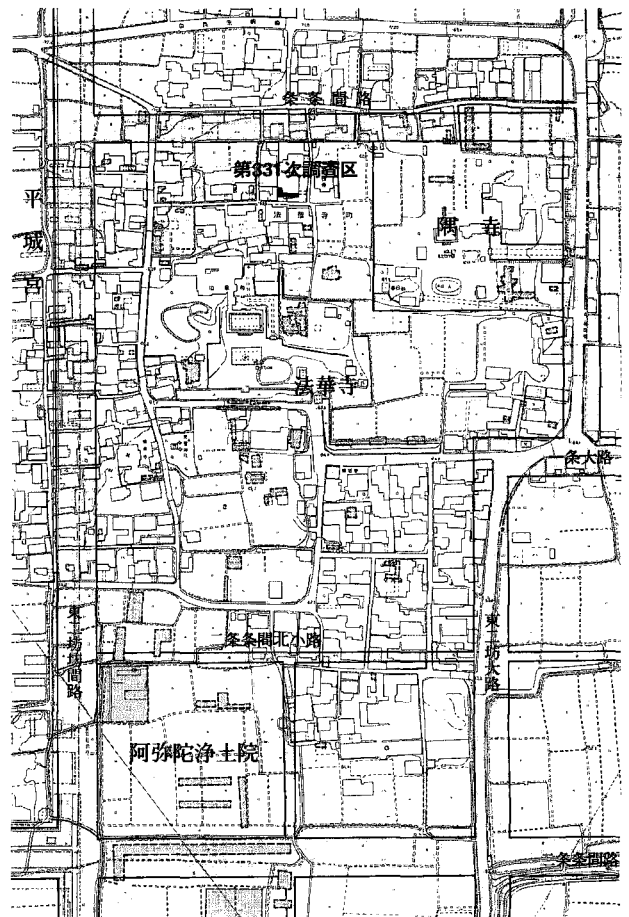


図147 法華寺旧境内地内の調査位置図 1:5000